

# エッセイ



教室「道草の詩」 貫井 こう

## 野球に情熱を燃やした母子

筑西市(元市内在勤) 杉山 千昭

娘が結婚し千葉へ定住した後、二人の男の子が誕生した。しかし、二人が未だ少年時代に父親が病で急逝したので、その後は娘が女手一つで兄弟を育て上げた。これは、次男が母親の手を放れるまでに、私が見聞した母子の野球熱中振りを綴ったものだ。どうやら、彼は幼少の頃から野球に関心が高かったらしい。そして、子供を応援するうちに、母親も野球ママに変化していったようなのだ。あれは次男が幼稚園に入園した頃だっただろうか。兄弟で我が家に遊びに来た時のことだ。二人を連れて、近所の公園にキャッチボールをしに行った時のことだった。兄がボールを投げ、弟がバットで打ち、じいさんがキャッチャーだった。兄が何回投げて、弟のバットにボールが当たらない。何回か繰り返しているうちに、弟はとうとうバットを放り投げ、グラウンドに大の字になって大声で泣き出してしまった。手足をバタバタさせながら悔し涙を流す姿を見て、彼の野球に対する情熱を見たような気がした。

孫が小学校に入学するや、市内の少年野球チームに入団し、ますます野球に熱中するようになった。同時に、

娘も追っかけながら野球ママを自認するようになったらしい。かつて私も、近所の道路を球場にして、友達と三角ベースに夢中になった少年だった。どうやら孫は、じいさんの野球好きが隔世遺伝したのかもしれない。

彼は長ずるに及び、ますます野球にのめり込むようになり、つれて道具にうるさくなった。

「じいちゃん、明日道具を見に行きたいのでいっしょに行ってよ」

電話一本で、スポンサーを呼び出す術を覚えたのだ。千葉と茨城からはるばる出かけて行き、上野で待ち合わせた後、お茶の水、市ヶ谷、代々木、新宿と彼が決めてある店へと同道したものだ。何故か中央線沿線の店ばかりで、前もって決めてある専門店のようだった。どの店へ行っても、商品を手に取りながら簡単には決まらない。それを知って、私は彼が探している間は店を出て、近所の喫茶店で時間をつぶすようになった。一服してから店へ戻り、

「どう決まったかい」

「欲しいものがないから今日はいいや」

遠方から時間と交通費をかけて出かけて行った結果が、この一言だった。

しかしある時は、いつものように喫茶店で一服して戻

ると、

「これに決めたから」

と言いながらグローブを見せた。値札を見た途端、びつくりして近所の銀行に駆け込んだことがあった。どうも高級品志向のようで、スポンサーの懐具合は気にしていなかった。しかし、この時も道具からこだわる、彼の野球にかける情熱を感じたものだった。

娘からの呼び出しを受け、私もあちこちの球場へ応援にかけてつけるようになった。退職後暇なじいさんを気遣ってくれたらしい。初めての球場ばかりで、追っかけも行き着くまでに疲れたものだった。しかし、子供たちのプレイは楽しく、外野手の後方で応援しながら、飛んできたボール拾いを兼務したこともあった。

「一番、セカンド伊藤君」

追っかけを始めてしばらく経った球場で、バックネット横の放送小屋の拡声器を通して、何やら聞き覚えのある女性の声が聞こえてきた。小屋の窓越しに見えたのは、なんとマイクを持った娘の姿ではないか！いつの間にか場内アナウンサーになっていたのだ。母親の声で紹介された息子はヒットを打てたのか。びつくりしてしまったじいさんは、結果を確認できなかった。いよいよ母子して野球にのめり込んでしまったらしい。

「成東、合格したわよ！」

「そうかよかったな。おめでとーう」

早朝に娘からの電話で、次男が成東高校の入学試験に合格したことの知らせだった。母子共に望んでいた学校だし、通学にも無理はなく、伝統校として申し分ない。亡き父親も喜んでるに違いない。

孫も高校へ入学すれば、将来を展望して勉学に励むに違いないと思っていた。ところが、なんと野球部に入部したというではないか。野球に対する情熱は、どうやら冷めてはいなかったらしいのだ。文武両道を看板にした伝統校らしく、野球部も人気の部活のようだった。なにかと費用もかかる部活動に違いないのだが、どうも母親の応援は今まで以上にボルテージが上がったらしい。更には、本人の叔父に当たる私の息子が野球にうるさく、試合に臨場し応援かたがた、技術指導もしたらしい。家族中の応援団を引きつれ、本人はますます熱中し、その先の大学受験はどうなるのか、身内の心配は聞こえていたのだろうか。

孫は何故か、右投げ左打ちで、今アメリカ大リーグで大活躍の選手と同じだが、一番、セカンドだったから、大リーガーとは異なる。一番の打順を心得、出塁

を心掛けていたようだが、相手投手と初対面となれば、なかなか苦労もあつただろう。但し、守備振りには随分感心したプレイを見せてもらった。一、二塁間は守備範囲が広く、結構打球が多く飛んでくるポジションだった。

ファースト寄りのゴロを横つ飛びでキャッチし、体勢を崩しながら一塁に投げたり、またセカンドベースに近いゴロを逆シングルでキャッチするや、ボールを近寄ってきたショートに投げ、ショートが一塁手に転送してアウトにする等。なかなか華麗な守備振りを見せてもらった。大柄な体型ではないから、一番、セカンドは、適材適所だったのかもしれない。

実家の壁に写真入りの新聞記事を拡大したものが、額に入れて飾つてある。記事は、孫が所属した成東高校が夏の甲子園を目指し、千葉県予選会で一勝した時のものだった。ゲームが終了し、勝利を手にした部員達がベンチを飛び出す瞬間をとらえ、全員の喜々とした顔が明るく素晴らしい写真だ。走り出すメンバーの中には、孫の笑顔も大写しされ、「やったぞ」と声が聞こえてきそうなカットだ。残念ながら甲子園は届かなかったが、「古豪校の勝利」とか、記事も成東高校を称え、なかなか重々しい。母親が新聞を切り抜き、拡大して額に保存したものと思われる。母子が築いた少年野球の結晶が、一枚

の写真に結実。なんとも微笑ましく、何度も見入ってしまう。それこそ母子の野球にかけた情熱が写し出された、記念の一枚だ。

その後、孫は大学に入学した。しかし、校内野球部の技術レベルが高いと自覚したらしく、入部はしないと聞いた。いよいよ野球にかけた情熱は冷めたかと思っていた。ある日、我が家に孫が一人の女性を連れてきて紹介してくれた。結婚することになっている女性だという。聞けば、同じ高校の同級生で、しかも野球部のマネージャーだったというではないか。高校卒業以来数年経っているが、この間お互いにサインでも交わしていたのだろうか。この報告を受け、孫の野球に対する情熱は冷めてはいなかったのだと、ついニヤリとしたものだ。

その後、結婚式場で並んだ二人の喜々とした顔を見ながら、これは孫が満を持して打ったホームランだと、胸中で万歳を叫んだ。そして、母子が野球に燃やした情熱が、見事に結実したと確信した。

これからは、孫が選手から一家の監督になり、マネージャーと共に明るい家庭を築いていくように願っている。そして追っかけママは、バックネット裏から静かに見守り、じいさんは、はるか外野席から声援を送りたい。

## 井月を追って…車中泊四日の旅

森 高柳 正彦

コロナも落ちつき始めた四月、久し振りに遠出することにした。ふらりと常磐道を北上し、磐城に向かった。目指すは長岡藩、いや新潟長岡市へ。磐越東線・西線に沿って走る。

四、五年前の自分なら千五百ccのバイクで一気に走るのだが、今は半分の六百五十ccの軽自動車だからそうもいかない。会津まではのんびり走れたのだが、その先は一車線だ。有料道路とはいえ後続車にはかなりの神経を使う。車を動かす時、年齢的には枯葉マーク、いや四つ葉ステッカー世代なのだが、今でも年一万キロ走る自称ジムニーストの自分。内心マークは付けたくはないのだが、後続車に追い越しを諦めさせるためには有効なので、リアウインドウに貼って走ることにした。

何故に長岡へ向かったのか、井上井月碑が市内にあるというのでそれを見るためだ。

井月（克三）は、文政から明治二十年まで生きた漂泊俳人（門弟千二百人）にして書家、一説には槍の使い手とも言われるが詳しいことはわかっていない。山頭火や漫画家つげ義春ではないが、私にとっても興味深い人物だ。

戊辰戦争当時、長岡から戦禍を逃れて全国を放浪し、辿り着いたのが長野伊那谷である。気分が良い時は「千両千両」と言うのが口癖で、晩年は酒浸りの乞食侍として、村の子供に石をぶつけられ野垂れ死にする。そんな生き方に魅了された自分も、十年前に伊那谷を訪れたことがある。彼を主人公とした映画「ほかいびと」を見た時、井月句の掛軸数本を所持している友人宅を訪ねたりした。

そのような思い出を胸に、長岡市中心街から少し離れた悠久山公園に向かった。句碑は、桜祭りや賑わう場所から少し離れた蒼紫神社鳥居側にあった。

長岡といえは河井継之助、米俵百俵の小林虎三郎、山本五十六などを輩出した新潟県第二の都市である。園内の彼等の碑と並んでひっそりと井月句碑は建っていた。彼の代表句といわれる「何処やらに鶴の声きく霞かな」が今から三十年前に長岡の有志によって建てられていた。私は何度も、字面をなぞりながら口ずさみながらその場をあとにした。今日の車中泊地、道の駅「R二九〇とちお」に向けて。

栃尾は雁木の町、油揚げ、穂垂れ祭の地として有名なことはここに来て初めて知ったことである。一人旅は新知識を得られる機会であり、若返りの時でもある。

町の中心地近くの秋葉神社で、偶然出会った歴史好きの古老八十八歳との一時間余の話も楽しかった。日本のミケランジェロともいわれる石川雲蝶の奥の院の龍の彫刻、芭蕉や謙信等の境内にある諸石碑は、関東から訪れた者にとつてはどれも興味深いものであった。

帰路はまだ雪残る山々を眺め、入広瀬いりひろせの道の駅へ。ここはツーリングで一度だけ二十年前に訪れた場所だけに懐かしい。只見線沿いに柳津やなぎつへ抜けようとしたが、雪で通行止め。Uターンして小出インターから関越道へ。途中渋川市の道の駅「こもち」で車中泊。翌日は、大雨の中一気に山武へ突っ走る。四泊五日、走行距離はちょうど千キロメートルを指していた。

あれから二か月経つ今朝方、あの古老から聞き覚えのある声で電話があった。

「その後元気があ、そのうち一杯やるべえ」と。旅後に出した礼状が余程嬉しかったらしい。

## さらばトリフォニー

五反田 竹内 克隆

電車に乗る時に利用させていただく成東駅から至近のMさんの駐車場に、今回も午前十時過ぎの乗車に合わせ、家内の運転する軽自動車を停めた。令和五年四月十四日金曜日、去年の暮れから約四か月ぶりである。

「今日はお二人でどちらへ？ いいお天気で何よりね」  
我々より歳は少し若そうな、愛想のいいMさんの笑顔がこぼれている。

「いつもお元気ですね。ちょっと東京まで、よろしくお願ひします」

「行ってらっしゃい、気をつけて」  
「行ってきます」短いやりとりの中に、お人柄の良さを感じ取り受け止めて駅に向かった。

平日のせい、車内は空いており、余裕の着席で年寄りには何よりであった。コロナの勢いの衰退によりマスクの着脱は個人の判断になったが、ノーマスクの乗客は皆無である。まあ用心にこしたことはないだろう。家内はさっそく若者気取りでスマホをいじり出した。ゲームでも始めたのか、私には関知することでもない。

今日は亡母の誕生日でもある。幾つになっても母のそ

れは忘れることがない。同時に三年前のこの日が浮かんだ。「さんむ医療センター」の病室のベッドは人生最大の試練を翌日に控え、吉か凶か千々に乱れる思いの果てに、人生の残りの運(す)で使い果たして希少であろう)を信じて決死の覚悟を決めたのだった。そして、結果は奇跡的な生還を得て今がある。

「母さん、貴女のお陰でまだ命を載っている。感謝です」毎日の焼香、勤行でつぶやいている。車窓から見ると昔日の勤め人時代に馴染んだ風景の中に、こんな思いを巡らせながら電車の心地よい揺れに任せているとたちまち千葉に到着。さらに快速に乗り換えも順調で、目的地の錦糸町下車も短時間と錯覚するほど早く感じた。

「トリフォニー」とは、墨田区が威信とプライドを結集して建立したと思われる「墨田トリフォニーホール」と命名された立派なコンサートホールのことである。

「トリ」は三つ、「フォニー」は音を表現。三つとはアーティスト、ホール、皆さまの意。これらが三位一体となって音を創造する意味が込められているという。そしてここをフランチャイズに区民の楽団として愛され活動おざおせいを続けているのが、昭和四十七年(一九七二)に小澤征爾じさんが中心となり創立された「新日本フィルハーモニ

「交響楽団」で、この四月からは世界のマエストロ佐渡裕<sup>ゆたか</sup>さんを音楽監督に迎えて、新たな注目を集めている。今日はテレワーク中の次女も休暇が可能ということで、四年ぶりに親子で鑑賞となった。

内容がすごい。なんと辻井伸行<sup>つじいのぶゆき</sup>さんが登場して佐渡さんと共演、ラフマニノフの「パガニーニの主題による狂詩曲」とドボルザークの交響曲第九番「新世界より」である。辻井さん熱演のピアノが終わり、カーテンコールに佐渡さんが腕を組んで支えながら登場すると、会場は割れんばかりの拍手が鳴り止まなかった。大柄な佐渡さんと小柄な辻井さんの対比が実にほほえましく、顔を紅潮させて笑顔を振りまく辻井さんに、私もおのずと涙腺がゆるんで何度もハンカチで目を拭いた。家内も今回は途中の居眠り時間を払拭できたようで、次女ともども感激<sup>ひどしお</sup>一入であった。

このホールを訪れるのはこれで四度目となる。何ゆえにここに縁ができたのか、それは先月までこの交響楽団の職員であった長女がもたらしてくれた、年末のベートーベンの「第九」への招待であった。初めての平成三十年はドイツ人指揮者A・ビットさんの奇抜な演出に驚き、二度目の令和元年は貴公子然とした大友直人<sup>おおともなおと</sup>さんの流麗

なタクトに陶醉し、コロナで中断の二年をはさみ、三日の昨年暮れは四月の就任を前に佐渡さんの特別公演で、演奏の前にステージで挨拶と曲の解説を行う「前説<sup>まえせつ</sup>」といわれる独特の流儀と巧みな話術に引き込まれた後に、巨体が繰り出す圧倒的な指揮を目に焼きつけた。そして、今日の感激は思いがけない三人暮らしの終わりを告げる、娘から最後の贈り物でもあった。

\* \* \*

昨年一月、その長女がコロナでテレワークの対応となり、旦那を東京に残して我が家に引越してきて、二十五年ぶりに二階の自分の部屋を仕事場にして活動を始めた。昼を別にして朝と夜は三人で食事となり、家内は献立に苦勞しながらも蘇った母親の姿に意気高揚して、目には喜びが溢れている。夕食時には酒を飲みながら職場や業界の話が弾んだ。私に似て娘はいける口である。いつもひとり酒の私も、相手を得て思わず顔が綻<sup>ほころ</sup>んでいる。週に二度ほど出勤になることが多い。朝は私が成東駅まで送り、夜は家内が迎えに行った。時間はほぼ一定しているが時には早出、終電にもなった。家では一心不乱にパソコンと対面しているようだが、その姿は知る由もない。娘の専門分野は広報・企画ということで、大学卒業後にデザイン学校で学んだことが大いに益すると言ってい



た。また、数多い転職の経験で会得したものが今の自分を確立した要因と思われ、一極集中、定点観測のような安定的と思われる生き方に比して、不安定で苦勞が多いと下世話な見方はあろうとも、艱難かんなんを克服してきた自信を話の中に垣間かいま見た。変化を楽しんでいるようにも見えた。

だが、そんな三人暮らしは足早に過ぎ、季節は巡り令和五年正月を迎えた。丁度一年を経た二月の初め、突然交響楽団を離れることを切り出した。時々「ここでやるべきことは終わった」と口に出すこともあったが、急遽、電撃的な事態の出来に苦渋の決断を下したのである。帰京はコロナの状況次第と思っていたが、かくして予想より早く一緒に暮らした一年あまりが終わりになった。

思えば何日送り迎えをしたことだろうか。百日以上にもなろうか、いつしか私たちの仕事の一部になっていた。平凡で静寂な後期高齢者の世帯に潤いと呼びこみ、煩累はんるいを押さえて喜びと生き甲斐を運んできた。五十歳を過ぎても子供は子供、日ごとに遠い昔の子育て時代が普段のようになり、対する娘も臆せず自然体で子供を演じていた。娘よ、ありがとう。貴女のいた時間は、私たちにとって何よりの贈り物だった。

三月の末日、引越しの荷物を見送る家内の目にうつすらと涙が浮かぶ。胸中に去来するものはなんだろうか。力が抜けたような後ろ姿が淋しそうだ。

成東駅に娘を最後の送りとした。車中、エールを送った。「まるで必殺仕事人みたいだな。新しい指令を鋭意突破せよ！」

「ありがとう。お世話になりました」決意と安堵の笑みを残して改札に消えた。

\* \* \*

演奏会が終了してもしばらく退出せずに、三人で名残惜しそうにホールの隅々まで眺めていた。佐渡さんの等身パネルの前で記念の写真をスマホに収めた。その後、コーヒー店に立ち寄り名演の余韻に浸りながら、次女の仕事や現況、長女の新しい仕事など話は尽きなかったが、気がつけばたそがれが迫ってきて、辺りは紅灯緑酒の街に変わっていた。

「貴方も体気をつけて頑張れ！」次女にエールを送り、帰宅のホームに向かった。

「終わったな、もう来ることはないだろう。さらばトリフォニー。ありがとうトリフォニー。人生の終盤に最高の思い出になった」

ネオンの波に向かい何度もつぶやいた。

## 脱走した二人は今…大正生れの独り言

埴谷 平出 行雄

昭和二十二年七月、私は消防団員の一人となった。睦岡村本部員である。同日、四、五人が消防団員となった。

昭和二十七年頃であろうか、ある日非常召集がかかった。本部員への通達だ。「Y少年院から二人が脱走した」とのことである。附近の町村に対して、脱走者の行方を求める少年院の行動であったのだろう。村役場へは消防団長I氏、本部長W氏も来ていた。指示に従って各方面に向かった。今と違って自動車はなし、携帯電話等は勿論ない。

私は一人県道を戸田、成東方面に向かった。自転車を使つてである。十五分位過ぎた頃である。その二人に出合ったのだ。下戸田から埴谷の方へ向かつていた時だ。両側が田んぼの県道である。青い服を着た二人だから、直感的に「この二人だな」と思った。

「おい、お前ら俺と一緒に来い」と声をかけると、二人はおとなしく私の言葉に従った。二人を伴って埴谷の方へ向かう。百五十メートル位離れた人家の生垣の所に来ると、「ちよつと待って下さい」という。「何だ」と聞くと、腹がへって動けないというのである。

さて困ったなと考えているうちに、一台のトラックがやって来た。私が止めたのか、運転手がそれと察して止めたのか忘れたが、車から降り近寄って来た。簡単に事情を話して空席の荷物台に自転車と共に二人は同乗して、睦岡役場前まできて止めてくれた。

もし、トラックが来なかつたらどうなっていただろうか。幸いをかみしめて車にゆられた。役場を通過した時、駐在所の前で止まった。これは早いと感心しながら二人を降ろし、自転車共々運転手に礼を言った。玄関前に立ち声をかけたが、誰もいない。署の庭を通つて裏の役場に向かった。小使室に向かった。役場の職員が二、三人いた。土間に立たせておくと「煙草が吸いたい」と言いだした。

私は、傍にいた人から巻煙草を二本もらつて彼等に渡した。二人はこの煙草を、うまいうまいと吸つたのではなからうか。誰からもらつたかはおぼえていない。私は吸わないので、役場職員のTさんだと思う。「流石は平出さんだね」という声が聞こえた。「人の何かで相撲をとる」ということがあるが、まさにその事実だったのだろうか。

とにかくしているうちに、駐在所の警官が来た。何もいわずに二人に手錠をかけた。「かわいそうに」と思っ

たがどうしようもない。二人は非常におとなしい心のやさしい人だと思う。それを無慈悲にも一言も言わずに手錠とは。心中余り面白くなかった。さも警官一人の手柄のように思えたからだ。

私は「これで私の用事はすんだ」と思ったので、職員に挨拶して自宅に戻った。同時に召集された団員はまだ帰って来ていないようであった。

帰途についたが、考えてみると何か腑に落ちない気分であった。消防団長や本部長がいたのに、何故出て来てほめたり慰労の言葉をかけてくれなかったのか。家に着いてからもその想いの言葉が続いた。

あとで聞いたことだが：大変なことをなしとげたが、考えてみると非常に危険な行動であり、二対一なのでもしも凶悪な人達であれば何か起きたのかもしれない。今後はこのような行動はしてほしくない。そのために、ほめもしなければご苦労様の言葉も言わなかったとのことであった。団長、本部長は、その思いを深く察していたらしい。

私も今にしてみれば、事件が起きなかったのは誠に有難いことであった。それに引きかえ、警官の私に対する行動は一考を要するのではないかと思った。

それにしても、連行された二人はどのようにしてY少

年院に帰ったのだろうか。帰院したその後はどうなったのだろうか。今も私の頭を離れない。七十年も昔の、あのおとなしそうな二人のことを思い出す。

## 三種類の花、ワクワク記

姫島 鵜澤美知子

「さあ、好きナだけ、ここの植木鉢とプランターに、お花のタネを蒔いていいわよ」

今年（令和五年）四月半ばのこと。

小学三年生と一年生の孫息子に、フレンチマリーゴールド、千日紅、朝顔の三種類の花のタネを蒔いてもらった。都内に住む娘家族が帰省する日に合わせて、数個の植木鉢とプランターに土を入れておいた。

去年の秋、孫たちと共に採ったタネもある。どれも自家採取で、大量に保存してあった。

植物がどのように育っていくのかを、孫たちにも体験してもらいたかった。ワクワク感をわかちあえればどの願いを込め、二人がバラ蒔きをするようすを見守った。

タネをわしづかみし、大声で花の名前を言い、競争しながら「ソーレ、ソレ、ソレ！」と無邪気に蒔く姿に、笑いがこみあげてきた。

### ◎車の買い替え記念のマリーゴールド

昨年六月、私の軽自動車を買替えた。その記念にと、フレンチマリーゴールドの苗を二十本用意した。開花期

間が長く背丈の低い種類で、オレンジ色をポンポンと咲かせる元気をくれる花だ。

予想通り秋まで長期間咲き続け、たくさんのタネを採ることができた。

フレンチマリーゴールドについて調べてみると、次のようなことが分かった。

・花の香りに虫を寄せつけない効果があるといわれている、センチュウ除けとして用いられることが多いとのこと。とは言え、すべてのセンチュウに効果があるわけではない。期待できるのは、ネグサレセンチュウに対してとのことだ。

・ハーブティやハーブバスなど、ハーブとして楽しむのは、通常のマリーゴールドとは別の種類なので要注意。

・タネ蒔きは、四月から五月の晴れた日の午前中を選ぶ。

・育てるにあたり、絶対に欠かせないのが日光。真夏の強い西日は当たらないようにした方がよい。

・夏になって花が咲かなくなったら、草丈を半分ぐらいに切り戻しておく、秋の初めに再び開花する。

・挿し芽で増やす。

・フランス王室の庭園に導入されたのちに広まったことから、「フレンチ」と付くと言われているようだ。

※「LIMIA、住まい・暮らしの情報メディア。生活の知

恵・花壇にも鉢植えにもインパクトのある、元気なマリーゴールドの育て方」より

孫たちが蒔いてくれたマリーゴールドの発芽率は良かった。我が家の花畑に地植えし、四十株ほどが順調に育っている。

生育状況は、孫たちにスマートフォンで写真を送り、報告している。

### ◎暑さ、乾燥に強い千日紅

十数年以上前から、千日紅の三色のタネを採取し育てている。真夏から秋、庭や畑に色どりを添えてくれる、季節感のある花だ。

孫たちはタネを蒔くとき、

「これは白い千日紅！」「次のは赤紫！」「その次はピンク！」と、声を弾ませていた。

か弱かった苗はしっかりとした株に育ち、フレンチマリーゴールドのとなりで、のびのびと育っている。

千日紅のことも調べてみると、六月から九月の間に切り戻して姿を整え、新芽を出させると良いとあった。これは私も実践している。

コロンとした愛らしい姿と、美しい色合いが印象的な

千日紅。開花期が長いのに加えて、ドライフラワーにできるのも魅力的だ。

江戸時代の初期には日本に伝来していたとのことで、盆や秋の彼岸のころに咲く。花期が長いことから、仏花に多く用いられていたという。

寄せ植えや手芸品の花材としても人気があり、私にとっては、夏には欠かせない植物だ。

### ◎早起きして朝顔観察

朝顔を観察するには、朝寝坊をしていられない。今朝はどの色が咲いているだろうか！庭先へ出るまでの数十秒、ワクワク。

我が家で一番古くから育てている朝顔は、丸みのあるハート形の葉をした丸葉朝顔である。十年以上前、幼友達からもらった。こぼれダネで増え、直径八センチほどの愛らしい赤紫色の花を次々と咲かせる。

『松江の花図鑑』には、丸葉朝顔について次のようなことが書いてあった。

「熱帯アフリカ原産。江戸時代に観賞用として渡来し、現在では各地に野生化している。花は直径五〜八cmの漏斗形で、紅紫色を中心に赤、青、白色などもある」とのこと。

次に古くから育てているのは青紫色の朝顔で、琉球朝顔によく似ている。タネは十年ほど前、福岡県のペンフレンドが送ってくれた。ときどき、花の模様が金粉をふりかけたようになり、趣がある。

これまで何人も花友だちに、「私の大好きな朝顔です」という一言をつけ加え、タネや苗を差し上げてきた。

我が家の庭先では、他にピンクや白の朝顔なども咲き、それぞれ思い入れがある。水色は、上の孫息子が一年生のときの自由研究で育てた時のもので、「充希朝顔」と名付けてある。

花友たちから「充希君朝顔やピンク、青紫色が揃って咲き、今朝は感動しました」とラインで写真が届くこともあった。同じ植物を共有して観察でき、こちらの心もあたたまる。

今年の夏は、一年生の「洗希朝顔」の鉢が我が家にある。一週間の家族旅行に出かけるため、その前後を含めて半月ほど私が預かっているのだ。

二株が植えられていて、一株目は大輪の涼しげな水色が咲いた。一日に一輪か二輪咲き始めたので、その都度

孫に報告している。

「けさ五じはん、こうきアサガオのみずいろは、二りんさきました」というように、ラインで写真と仮名文字でメールを送る。

このところ、二株目の紫色の大輪が咲くようになった。これまで私が見たことがなかった、ふっくらとした花びらで珍しい色合いだ。前日の夕方のツボミの形で、翌朝に何輪咲くかの予想はつくのだが。

八月十一日、朝顔チェックのために五時過ぎに起床。思いがけず、大輪の紫色が三輪咲いていて、美しさにドキッとさせられた。その鉢を日陰に移動した。少しでも長く、花を見守り続けていたかったからだ。すると、三時間後もまだ美しさを保ってくれていた。

そのようすを動画に撮り、洗希に送信する。

「おはようございます。けさ五じ二十三ぶん、むらさきいろのこうきアサガオが、三りんさいてくれました。とてもきれいです」

と、添え書きをした。

すぐに、洗希から返信が届く。

「みいみい、アサガオのおしらせありがとう」

ハートとニコニコマークのスタンプが、たくさんついてきた。

「どういたしまして。さいしょのみずいろもステキだっ  
たけれど、つぎのむらさきもきれいな。ツボミがまだい  
くつもあるの、おうちにもちかえってからも、さきそ  
うですよ。

はやおきして、かんさつしてね。

このタネをとったら、かならず、みいみいにもくださ  
い！」

欲張り祖母は、早くもタネの予約をした。

## 「ユキノリ」へ冥福を祈る

小松 齊藤 利治

「ユキノリ」は堅く口を結び、静かに首を横に振ると確然として、数人の級友たちの指すその青の単色画を自分の物ではないと否定した。そして、もう一枚の普通に色彩の盛られた方が自分の物だと主張した。

古い木造校舎の一室の黒板には二枚の絵が張り出され、その前に数人の悪ガキ共が立ち塞がり、彼が他人の作品を名前を書き替えて横取りしたと騒ぎ立てていた。教室の前の方に「ユキノリ」が座り、傍に私もいた。それに担任の女教師の姿があった。

低学年の小学生にしては手の込んだ悪ふざけであって、巧妙な署名の改竄が二枚の絵の上になされていた。そしてその目的は、ただ単にお人好しの「ユキノリ」を貶めることにあった。彼自身もまた私も、全く身に覚えのないことであった。

二枚の絵はそれぞれ本人の署名が完全に塗り潰されて消え、その脇に半残半消の体で偽名が見られ、またその隣隅には原名が新たに記されていた。「ユキノリ」の絵には従って、他人の手で彼の名が再度書き入れられた手前に、もう一つ同一犯の手による私の名「トシハル」が

半残りに読めるのだった。これでは恰も元来彼自身の絵を、彼が「トシハル」から横取りに掛ったと疑われ兼ねない状況であった。もう一枚の私の単色画にも同様の手が加えられ、今度は「ユキノリ」が下手くそなそれを、私を相手に押し付けようとしたと誤解されるものだった。実に手の込んだ意地の悪さがあった。

だが、己の青一色の稚拙な絵を私は恥じた。「ユキノリ」にも仕掛け人たちにも、そして女教師の前にも、誰に対しても本当に恥じた。

そしてそのやり切れなさから、自分自身の絵を自分の物でないと偽証して、悪童共の悪巧みに加担したのだった。私は卑怯者だった。

私の家が、教材のクレヨンを揃えることのできないほどに貧乏だったわけでは決してない。村の中では平均的な自作農であった。ただ、入学以来新たな校内での生活に馴染めず、悲しみと苦痛との日々を重ねていたのだった。教科書やノートを呪い、鉛筆や消しゴムを憎み、女教師の紙とインクと白墨の匂いを怖れた。心ここにあらざる毎日であって、動物園内で故郷のオーストラリアの平原を夢見る遠い眼をした、あの高村光太郎の「ぼろぼろな駝鳥」の如き小学生だったのである。それ故、担任から「頭の中空っぽ」と言われ、また「十三月」と称さ



れた。小学三年になつても時計の針が読めず、親が学校に呼ばれたりした。時計の短針が徐々に動くのが意地悪く思えた。ジツとしていて一時間経つたら一挙に進めば良いのにと不満だった。当時のことがトラウマとなり、時計を見る時、不要な不快感が一瞬身を走る。

未だ戦後十数年くらいで、戦時の教育の名残りが尾を引いたためか、男の教員は平然と悪ガキにビンタをくれたし、女教師も直情的で児童等への好みもさほど隠さなかつた。一度クラスの中の「よしえ」という女児が、背後から髪を引つ張られて大きな声で担任に訴えたのであるが、女教師は苛めた方を叱ることをせず、逆に苛められた方に向かい堅い険を含んだ声で彼女を咎めたのであつた。「よしえさん、筆むしるとは引き抜くことよ！」「よしえ」は机に顔を伏せて黙るばかりであつた。

私は自分が何故これほどまでに学校を嫌つたのか、今もって判然と言葉に言えぬ。強いて申さば、一つの場所に、同じ方向を向かされて束ねられることへの反発だつたやも知れぬ。時期あつての始学の重要性などわかるはずもなく、いずれに致せ学校は私の居場所ではなかつた。私のそれは村の中での遊びにあつた。歩き走り跳び回り、私の体は天からの小さな野生の贈り物であり、疲れを知らずそれを露にした。季節は私の中に溶け入り骨肉とな

り、私はまた季節に抱かれた。春夏秋冬は私になく、ただ暖かかったり暑かかったり涼しかったり寒かかったりした。そうした学齡前の日々を心の底から愛した。

浜の方から上つて来る子供等は、その血筋の中に大海の上での漁獲の緊急性と協同性とを要諦とする故か総じて声が大きく、性格が荒く、感情の制御に疎く直截的な傾向があつた。件の悪童たちも、そうした海岸部からの登校者だつた。しかし、「ユキノリ」はそんな中で異なつていた。育ちの良いような、笑顔に愛嬌があり、そして少し「ヤンキ頭」であつた（方言で後頭部やや絶壁をなす頭の形）。そして、彼も私も少しボーっとした子であつたから、浜の才気の煥発する連中にはあるいは我々は眼障りだつたやも知れぬ。彼等の苛立ちが、我々を擲揄の対象としたに違いないと今に推断する。

そうした悪知恵の餌食の延長で、一度「ユキノリ」が級長に選ばれようとした。これも件の改竄一派の画策であつて、ただ一意に彼を困らせ楽しむためのものだつた。彼等は彼の名を連呼して五月蠅うごくしつこく級長推薦の声を発し続けた（私は後年聖書の中に、同じような悪意を秘めた声を重ねる。「イエス」殺害を目論む者たちの合唱である。人間の負の遺産は今なお健在であるようだ）。そして当の本人はとみれば、慌てるふうも拒否したり得

意の色を浮かべたりする様子もなく泰然としていたのだが、担任の女教師がこの時ばかりは騒ぎを制して、「皆何か弱い人に無理に押し付けようとしているみたいですよ」と静めた。

彼が拙宅へ配達にやって来たのは、二十代の頃であつたらうか。農協からの肥料を降してしまふと汗をかいたらしい彼は、水を飲みたいが「この水道水は飲めるか」と、蛇口の傍に立つかつての同級生の私に訊いた。飲めるも何も私の家での唯一の飲料地下水である。公営水道はまだ布設されず、ペットボトル入りのそれは私などの知るところではなかった。結局彼は、かつえた口を蛇口に押し当てるようにして水を飲んだのだ。一期一会は普段着のまま何気なくやって来ては、また何事もなきよう過ぎていく。

彼がヤクザになつたと耳にしたのは、それから何年後のことであつたか。地元の「組」へ運転手として入つたとのことだった。人一倍のお人好しが、常人からすれば男の苦界と申すべき厳しい渡世の道に足を踏み入れ身を置くに至つた次第を、私は知らず想像もできぬ。やはり、今ではその道の人等に共通する鋭い眼光と不敵な表情を持つのだらうかと怪しむのだった。

それからまた何年かして、彼が亡くなつたと聞いた。

自宅とするアパートの一室でガス自殺を図つた外国籍の情婦の傍で、これに巻き込まれるような形で爆死したとの噂が伝わってきたのだ。こともあろうにあの彼が、一人の女性の悲し過ぎる自裁の決意を脇に、苦界の大渦の真只中へその生命を終焉させてしまつたのである。何とも言葉もないが、ここでもやはり、いつも周囲から損ばかりを被る彼の人の良さと不運とが私を打つ。そして彼の尋常ならざる横死は、堅気で実直な実家の勘気に触れるところとなり、身内の手で葬に儀されることなく、組の近しい者の手で葬されたと聞く。

不運の「ユキノリ」は道を半ばに若くしてこの世を去り、私は生きて今年後期高齢者の新参者と相成つた。学校嫌いのボーツとしたデレ助にも、加齢は惜しみなくやってくる。今まで普通にやってきたこと等が、普通にできなくなるのが何とも淋しい。「眼昏く馬重し」の老境である。心身共にボロボロガタガタとは言葉に過ぎようが、当らずとも遠からずである。そして彼が図らずも未完成で旅立つたように、私もまた生きてなお、彼以上に未完そのものである。それ故に、ほんの一步たりとも完成のそれに向け進みたい。この世には人間の作つた良いものがたくさんあるし、まして自然は謎と神秘と感動の宝庫である。そして、知識の収得にも歓喜の伴うことを

知る昨今である。

「ユキノリ」も私も、気が付けば日本人、気が付けば昭和の団塊の世代、気が付けば男で、そして気が付けば己自身であった。我々の根源的な問いは「why？」であろう。そしてこの問いを内包する限り、我々に消滅は許されぬのではないか？ 前進のみが存ずるのではあるまいか？ 遅ればせながら、人々が故人にそうするよう、私も「ユキノリ」の冥福を祈ろう。笑顔の忘れ難い少しヤンキ頭の彼の冥福を。

## 平成の奥の細道

成東 渡辺美佐夫

(一)

平成十四年の八月末、友人ら十名が羽田に集合した。早朝の便で秋田へ飛んだ。

能代からは五能線に乗った。途中の白神山地の青池に立ち寄って、その水の美しさに心をひかれた。日本海の広がりは見事であった。三時頃にはへなし艦作駅に着いた。人影もない小さな駅であった。電話をするとすぐに小型バスが迎えに来た。遂に「不老死温泉」に到着である。

(二)

夕方六時には、全員が海岸にあるS字型の露天風呂に入った。波打ち際からは百メートルぐらいであり、夕日が赤く日本海に沈んだ。入っていた三十人位の男達は一斉に「万歳」を叫んだ。

後方を振り返ると我々のホテルであった。その四階は女性風呂らしかった。女性達は皆素裸で海の方を眺めていた。彼女らは次々と海の方を向いて並びはじめた。

「わあ、すげーえなあ」と皆が声をあげた。

(三)

夜の宴会の時間が迫ってきた。会長の河野さんが「俺は最近落語を覚えたから聞いてくれ」と言って、自分で座布団を三枚ぐらい重ねて席を作った。落語がはじまった。他の人はビールを注ぎ合った。早くも横になる人もいた。トイレに立つ人もいた。宴は遅くまで続いた。

翌朝河野さんは「俺はもうやらないよ」と言った。他の人は「俺は聞いていたよ」と言い合った。忘れられない「不老死」の夜であった。

(四)

宿を早めに出て、津軽鉄道で金木の太宰治の生家を訪ねた。斜陽館である。三階建ての大きな家であり、大変な部屋数である。そこで太宰についていろいろと教えていただいた。

すぐ近くには津軽三味線会館があり、どの曲も迫力のある演奏であった。その中でも「津軽よされ節」は全員が立ち上がって手拍子をして演奏を楽しんだ。

(五)

今日は太宰の足跡を訪ねて「小泊こどまり」へ宿を決めた。途中で女中の「たけ」のいた小学校にも立ち寄った。バス

で「小泊」に着いた。夕方となり多少空腹を覚えたので、バス停近くの店で一夜干しのイカを一人一パイずつかじった。

宿は港の見える小高い丘の上にあった。夕食となり食堂へ案内された。イカの刺身、イカのパエリア、イカの大ぶら、全てイカ料理であった。テーブルに近づいて全員が声をあげた。「イカだあ」

翌朝は帰港する船のエンジン音で目が覚めた。

(六)

いよいよ今日は竜飛岬行きである。文字通り百メートル位の崖の上にあった。土産物店や食堂があり、石川さゆりの「津軽海峡冬景色」が広場に流されていた。近くの人は皆声を出して歌っていた。岬の下は勿論津軽海峡であり、眼下に見えていた。突端には一台の大砲が据えられて、ロシアの方に砲を向けていた。

有名な階段国道を下ってみた。海辺には漁師の家らしい数軒があるだけで、冬の一面の雪景色を思い出した。荒涼とした光景だろう。

ここで偶然に、オーストラリアのパスからという十名ぐらいの高校教師に出会った。彼らは三内丸山遺跡を見て来たに興奮していた。アボリジニーのことを思い出

したと話していた。

(七)

その晩は、急に浅虫温泉と決定した。宿は陸奥湾に面した古風なホテルであった。何年か前に来たことのある私にはなつかしさを憶えた。六日間の旅を思い出して、今宵もいさり火を遠くに見ながら深更まで話はつきなかつた。

(八)

翌日、三内丸山遺跡に入った。まず六本の黒くなった長柱に驚いた。三内丸山遺跡は六千年から三千年位前までの縄文時代の跡である。二〇二一年七月十三日にユネスコの文化遺産に決定されている。柱の根元には栗の木が使用されている。当時栗を栽培していたと知って、また驚きであった。こんな大きな木を切り倒して運び柱として使ったとは、さらに驚きであり尊敬を覚えた。

中央部には、横十間縦三十間の大きな建物があった。中央に炉のあとがあり、多くの人が集合して生活していたと思われた。昨日のオーストラリア人の驚きも理解できた。

古代の空気を十分に吸って帰路についた。十七時の飛

行機で出発、すぐ下に陸奥湾や下北半島が見えてきた。飛行機は大きく右へカーブした。七日間の旅が次々浮かんできた。

不老ふ死温泉、竜飛岬、斜陽館、次々と浮かんだ。いいメンバーであり、いい旅であった。すばらしい友よ、ありがとう。七日間の奥の細道であった。

ふと何十年前も前に家族で行った静岡の登呂遺跡を思い出した。川の近くにあった遺跡はある時の大洪水で全て流されたか、全員が何かの病気で死亡して消えたとも言われている。

羽田の誘導灯が見えてきた。

改めて、メンバーよありがとう。

いい旅であった。

## 母へ

森 遠藤三千代

毎日のうだるような暑さ。何もせずただ何にもせず、一日一日だらだらと過ごしてしまふ。

学の無い私が俳句や川柳に頭をつかい、覚えた全ての文字を原稿用紙に書いていく。誰も私がこのようにしていることに驚きの声が聞こえます。

時にほめられ、時にうまくできなくて脳トレ脳トレと自分をはげましています。それは、母の俳句の赤ペンの入っているのを見たからです。

母は母の弟と妹と三人で同じ俳句誌に投稿していました。三人で句を作り、それぞれの句の出来具合に、時の経つのを忘れてるのが多かつたようです。

母はこの時入院していました。個室のおかげでよく三人は長い間話し合っていました。私は秘かに聞き耳を立てていたことを思い出しました。

あの日からもう何十年も経っています。おじやおばの句を見ることはできません。母の赤字の入ったNK俳句講座の句を私は持ち帰りました。

自分が句を作ることを始めた時から、この赤字がうらやましく一句一句作ります。下手です。下手でいい

のです。心にうかんだ文字五・七・五の中におさめながら、時には鳥に、時には空に、時には花に、時には風にと心をよせます。

母は時間を見つけて、生花を習いました。私には茶の湯を習わせました。お師匠さんは母の子供の頃から知り合いで、私達二人は土曜の午後は共に過ごしました。小人数の茶会の日、母が生けた床の間の花、私がお茶を立てて過ごした日日は今思うと、安らかな日でありました。

今日は本当に暑い日です。そう、暑い七月の末に母は逝きました。

明日は命日です。

## 日本について

津辺 神 蘭光

二年程前だろうか、朝日新聞の記事で、二〇四五年の千葉県の人口動態についての予測記事があった。その中で山武市については、人口が二〇一五年の人口から四七%減少すると記されていた。

減少はすでに始まっている。成東駅前の周辺を見てみると、これは本当だと思われる。「成東駅前あじよすつ会」（問合せ先―都市整備課）メンバーのN氏によると、駅からバイパスに至る地域で、全盛期から六〇を超える店や事業所が消えているそうである。

現在は、駐車場だらけだという。しかも、高齢化も進んでいる。また、ある予想では二一世紀の終わりには、日本人はいなくなるだろうということだ。

では、何故こうなってしまったのかを考えてみてください。少子化の問題は、ここ数年で起きたことではありません。何十年も前から言われていたことです。無能で自分のことしか考えられない政治家が、何の対策もしてこなかったからでしょうか？

出産施設の充実、子育て支援の拡充等々、打つ手はた

くさんあったと思います。無能な政治家は必要ありませんが、結果的にその存在を選挙によって許してしまった我々にも責任があるのではないのでしょうか？

かなり以前にどこの国の人が忘れましたが、フォン・ノイマンという科学者が、「二〇四五年には、ロボットがロボットを作り出す世界が出現する。人類はとても大変な状況におかれるだろう」と予言したそうですが、現在のAIの非常な発達を見ると、「そうなる」とこの世はどうなるんだろう？」と思ってしまう。

外国人労働者に代って、物の生産現場を担当するのであれば良いのでしょうか？ いずれにせよ、二〇四五年には、私はこの世に在籍していませんが。



私はメモ魔

〴〵毎日がメモで始まり、メモで終わる〴〵

五反田 萩原 正道

皆さんは、明日の予定、実施すること、約束など、ウツカリ忘れていたり、とうとうその日が終わろうとしていた時まで気がつかない、あるいはスツカリ忘れてしまっていたなどと、いろいろ失敗をしたりしていませんか？老人性の記憶喪失、認知症、アルツハイマー、ボケなどと、高齢になればなるほどその日やることが夕方になってキチンとできたかどうか、大変大事なことになるってきます。

ボケ防止、人とのコミュニケーション、その日しかできないこと等々、これが一日一日キチンとできればこんなにスバラシイことはないし、人との約束もキチンと守れたわけですから信用を失うこともなく、また明日から気持よく一日一日を迎えることができます。

そこで、私の毎日していることは「メモ」です。タテ、ヨコセンチ程度の紙に、〴〵今日やること、明日やること〴〵を番号をつけてメモしておきます。夕方になり、予定どおり今日一日が過ぎせたか、忘れていないことはないか、また、明日の予定も考慮に入れ、新しい明日の一步

をメモしておきます。

朝起きて今日やることをチェックし、その小さなメモはズボンのポケットに入れて常にチェックするようにして、できたものは消していく。こうして夕方になり、またチェック。寝る時に、明日の予定と今日忘れていたことがなかったかも一度チェック。

皆さんもぜひ実行してみてください。きっと毎日にハリが出てきて、〴〵よし、明日も元気でやるぞ!!〴〵と更にファイトもわいてくるというわけです。

## 「未病」ご存知でしょうか

美杉野 成毛 節子

ばばは東京、高田馬場で生まれ、二度の戦火にあい、十一回の住み替えの果てに、当地山武市美杉野に終の棲家を建て、九十歳の日々を重ねています。その間、様々な「おかげさま」をいただきましたが、今思うに、おかげさまの「要」は自然に添う暮らし方、食べ方にあつたではなく、ある（今も進行中）と確信しております。

千葉市から鴨川の山間地に移住後、「汝の食べ物を医薬とせよ」（医聖ヒポクラテス、古代ギリシャの哲学者）の言葉を掲げて、ゲルソンの食事療法を広める仕事をしました。この仕事によって生かされ、穀菜食を中心に玄米や胚芽米、野菜を食べ、短命な家系にめげず生き永らえております。

「未病」、昨今、新聞紙上や漢方薬のCMなどで耳にする「未病」、東洋医学に由来する考え方です。『ただ、未病を厳密に定義するのは難しい。例えばある団体では、メタボリックシンドロームなど自覚症状がないが検査で異常がある場合を「西洋医学的未病」、冷えやのぼせ、胃もたれなど自覚症状はあるが検査では異常が出ていないものを「東洋医学的未病」、慢性疲労などを「中間的

未病」としていますが、病気が健康かの二元論で考えるのではなく、連続的に考える未病領域があるというのは共通しています』

では、なぜ未病の考え方が注目されるようになったのか。『まずは患者のため。もう一つは医療費抑制に強くなる予防医療への貢献のためというのが理由です』従来の医師などによる医療が中心の環境から私たちの自覚的な意識によって、自らの健康を守ろうという意識が広がってきているのです。

高齢化による慢性疾患の増加や、ますます高額先端医療、新薬の保険診療などで医療費財源が追い詰められている現在、病気になる前の予防「未病」の考え方が大切だと思いつけるのが当然だといえるでしょう。

「汝の食べ物を医薬とせよ」医聖の言葉を暮しの要として、病気になる前の未病を心がけ、元気で長生きできれば万々歳ですね。

・参考文献 参考文引用『内

「未病を考える」朝日新聞朝刊

二〇二三年七月二〇日

## 銀幕の中の悪役たち

本須賀 川島 隆

かつて映画は、庶民の娯楽の王者でした。昭和三十年から四十年代は最盛期で、一週間毎に新作の二本立て、映画館はどこも満員立見など当り前の時代でした。昭和三十年頃、NHKの少年向けの連続ラジオドラマ「白鳥の騎士」が放送され人気でした。東映で映画化され、題は「笛吹童子」。主役は若き日の中村錦之助さん、街の映画館で観ました。善と悪との戦い。悪人を演じた俳優の名前は知りませんが、顔はよく覚えております。

当時の映画から現在までの、悪役をやられた俳優さん達を書いてみたいと思います。当時は悪役の俳優さんは肩身が狭かったそうです。憎憎しい役をやると自分の子供が学校で苛められたと話題になりました。

東映では、進藤英太郎さん。恰幅がよく悪家老、大身の旗本など堂々たる悪役ぶり。進藤英太郎さんは大映で名匠溝口健二監督の作品に多く出演され、山椒大夫、近松物語などで悪役のイメージはありません。東映に移り、悪役一筋生涯六百二十本に出演されています。晩年テレビに移り「おやし太鼓」で人気者になりました。享年七十八歳でした。

吉田義夫さん、時代物では欠かせない悪役俳優です。一目見れば忘れられぬ顔、小柄で一見怖そうですが、何となく憎めず愛嬌があり好きでした。寅さん映画にも度々出演しており、寅さんを先生と呼び尊敬している旅回りの芝居の座長役でいい味を出しています。テレビの悪魔くんのメフィス役で子供達の人気者になりました。享年七十歳。

東映は昭和四十年に任侠路線に、高倉健さん、藤純子さんを主役に多くの作品を送り出しました。任侠物ですから悪人だらけ。その中で活躍した悪役達を見ていきたいと思います。

山本麟一さん、いかつい顔にギョロ目で健さんの敵役で数多く出ています。新人の頃は、東映の人気シリーズ警視庁物語に刑事役で出演されています。後年、博徒ばくと役になるとは何かおかしくなります。敵役で多くの作品に出演され支えました。享年五十三歳、早い死でした。

今井健二さん、顔は悪役にぴったり、正にはまり役でした。下っ端役で、最後は必ず健さんに斬られる敵役一筋。健さん、山本さん、今井さんは明大の同期で仲がよかったようですが、演技が下手でセリフは棒読み。鶴田浩二さんに毎日叱られ頭にきて、鶴田さん呼び出して文句を付けたそうです。後で健さんが詫びを入れたとか。

後年任侠シリーズで四人の共演が多いのも面白いですね。今井健二さんは現在九十一歳とのこと。私にはまだ三代の感じでしたが、再放送のテレビのせいかも。

小池朝夫さん、憎らしい親分役がびったりでした。小池さんは洋画の吹替もやり、「刑事コロンボ」の声ははまり役でした。享年五十四歳。

天津敏さん、東映の時代劇で活躍。清水の次郎長シリーズでの大政役は当り役でした。身長百八十二センチ、堂々たる体格でした。教育者出身で知性的な顔、悪役もこなしテレビでは隠密剣士で敵役、人気がありました。任侠物にも多く出演されましたが、五十八歳で亡くなりました。

大映の五味龍太郎さん。大魔神シリーズでは、悪領主役、押し出しが立派で武士役が似合い、映画・テレビで悪役専門、大映出身のスターでした。享年八十歳。

伊達三郎さん。五味さんと並び大映の悪役俳優、同心役が似合い、テレビでも活躍されました。享年六十七歳。

神田隆さん、東映、大映、テレビ等、数え切れない程出演されている大スター。悪役だけでなく、真空地帯、ひめゆりの塔、母子像、警視庁シリーズの捜査主任、点と線、新兵隊やくざ、大魔神シリーズ等多く出演されています。悪役のときは実に憎憎しく、いい役では政治家、

官僚、軍人など堂々たる貫禄でした。

神田隆さんは、東京帝国大学文学部仏文科卒、超インテリなのです。数多い悪役俳優の中での大スターと思っ  
ています。享年六十八歳、大阪でエスカレーターに乗っ  
ている時脳梗塞で倒れ亡くなりました。本当に早い死が  
惜しまれます。

天知茂さん。新東宝出身、鋭い眼光、痩身はくせき白皙はくせきで異風を放っていました。新東宝では丹波哲郎さんも悪役でした。天地さんは座頭市の第一作では平手造酒みき役で、座頭市に斬られています。テレビに移り非情のライセンス、名探偵明智小五郎で人気を博しました。享年五十四歳、早い死でした。

名和宏さん、テレビの時代物で悪役ぶりを発揮しました。名和さんは、日活ニューフェイス第一期生で、石原裕次郎さんより人気ポイントが高かったそうです。能の金春流の出身で気品があります。デビューは若いお巡りさん、若原一郎さんと共演されています。素顔は温厚な紳士。享年八十五歳。

川合伸旺のぶおさん、テレビの時代劇でこの方の顔を知らない人はいないでしょう。悪代官・悪徳商人など凄い悪役ぶりです。「お主も悪よのう」のセリフが忘れられません。享年七十四歳。

菅貫太郎さん。面長な顔、眼の動き、一回見たら忘れられぬ顔です。悪徳公家が妙に似合い、底の知れぬ怖さ・不気味さを秘めています。映画「十三人の刺客」で暴虐な將軍の子を演じ、その悪役ぶりが話題になりました。私も観ましたが、正にはまり役でした。テレビの時代物には欠かせぬ俳優でしたが、交通事故で亡くなりました。享年五十九歳。

他にも多くの悪役俳優がおられます。小沢栄太郎さん、金子信雄さん、安部徹さん、遠藤太津郎さん、山本昌平さん、内田勝正さん、内田良平さん、成田三樹夫さん、以上の方達も皆鬼籍に入られました。

最後に、悪役というより斬られ役一筋の福本清三さんを述べてみます。東映出身、五万回斬られた男として有名になりました。セリフもなく、ただただ斬られるだけの映画からテレビへ移っても斬られ役に徹した人。いつも浪人役で顔は知っていましたが、どういう俳優さんかよく知りませんでした。とにかく斬られ方が凄い。大きくのけ反って倒れる、正に福本清三さんしか出来ぬ技と思えました。

NHKの特別番組も放送され、また本も出されて脚光を浴びました。ハリウッド映画トム・クルーズ主演のラストサムライに出演、見事に斬られる役を好演されました。

た。大秦で若い人達に殺陣を指導され、ハリウッド映画にも出演され「石の上にも五十年」、花を咲かせました。享年七十七歳でした。

悪役を演じ私達を楽しませてくれた俳優達。ほとんどの方が星になりました。五十代、六十代で亡くなっています。時間に不規則でハードな毎日、職業の所為かと思えます。

毎日再放送されている時代劇やドラマの中で、皆さん生き生きと活躍されています。まるで時が止まったように私達の中に生きています。これからどんな悪役俳優が出て来るか、うまく悪役を演じるか楽しみでもあります。

## 恩師からの手紙

九十九里町（元市内在勤） 齊藤 功

清明になって間もない四月十日、中学校時代の担任篠崎伸子先生よりお電話を頂いた。笥をたくさん貰ったのでお裾分けをしたい。それと今手紙を認めたので都合が良かったらという、来宅を請われるものだった。常日頃先生より恩顧を被っている私は、躊躇なくご厚意に甘え直ぐ伺う旨返事をした。本来なればひと月ぶりに拝顔の榮に浴するのだが、足の手術後療養の日々を送っている私は断念をした。そして老妻にそのことを告げ、指呼の間の先生宅へ行くのを頼んだ。

間もなく車が戻ってきた。玄関に太くて瑞々しき笥を数本抱えた妻が現れ、「掘ったばかり」と言った。それといつも通りの通りお菓子も。今回は紀州の「梅ゼリー」に「鎌倉の焼き菓子」。まるで息子に対する母親の心遣いである。そして手紙。書道に関心のある方ならご存知の文房四宝の老舗、鳩居堂の白い封筒に「齊藤 功先生」とボールペンの端正な文字の宛名。妻が早速台所で笥の皮を剥き始めて、象牙色の身を鍋に入れるまで見届けた。それから、裏に「鳩居堂製」とある上に「篠崎伸子」と真っ直ぐに記された気持ちの良い文字を見て開封した。

和紙仕立ての便箋数葉には、時候の挨拶から始まって私への安否を問う文言、手紙へのお礼、先生の日常生活のこと、先日小学生のお孫さんを連れて九十九里町内の文学散歩。そして教え子である私への励ましと、書簡文の模範ともなる文面であった。

速くて便利を至上の価値とするが当今のご時世。連絡は直ぐ届くメールか電話ばかり。それは目的を間違いない知らせるための実用的文体である。丁寧なる様式の書簡体の文章などは、まどろっこしく敬遠される。武者小路實篤の「仲よき事は美しき哉」ならぬ「速き事は素晴らしき哉」である。メールと手紙、私には「兎と亀」が連想される。近い将来、この「書簡(手紙)文化」が消滅してしまうのではと危惧している私は、今年卒寿におなりの篠崎先生のお手紙に安堵を覚えた。長文であるが、これを紹介したい。

庭の樹々が急に緑を増して来ました。今年は桜の開花も早く、何かせかされる思いの毎日です。手紙を書こうと何度も思っては居ながら雑事に追われて居りました。

その後足の具合は如何ですか。私はまだ右手の治療で通院中です。

先日いたゞいた毛筆のお便り、本当に一つ一つをうなづいて拝読。日本語の乱れや学校現場での古典への扱いの減つて来ていることなど思いますとさみしいと思いがします。本来の漢字など関係なく、あて字で楽しんでそれを堂々とテレビで放映している現在、子ども達は、正しい文字を学ぶ機会をどんく失つて行つていくように感じます。正しいことよりもその場が冗談で面しろければよいと云う風潮の中で暮らしているようです。あなたが今次々と読書されていらつしやる事をとでもうらやましく思い、また尊敬しています。

ところで金瓶梅がこんなにも具体的で身近なる内容とは知りませんでした。学生時代はたゞ書名や成立年代位で通過してしまっていました。今更ながら新しい体験をさせていたゞき大感謝です。辞書など使いながら少し勉強した感じです。と申しましても私のこと、家事雑事に追われて自分の時間がなかくとれない現状です。それに年齢を重ねて理解も弱まり、昔の事も忘れて来たりで悲しいですが致し方ありません。

この春休みは孫を数日預りましたのでこの際と思ひ立ちタクシーをたのんで荒生（あらおい、引用者）

の宮沢賢治の歌碑を見学させ、少し説明してやり次は我が実家の祖父の碑を本隆寺境内で見せて、そのあと楠音次郎の墓から竹久夢二の宵待草の碑、真忠組の碑から高村光太郎の智恵子抄の碑へまわりサンライズで休憩し帰宅。翌日は粟生（あお、引用者）海岸の徳富蘆花の碑を見せて来ました。まだ小四の孫にははやいとは思いましたが、いつしか思い出しにくるだろうと思っています。

たゞ粟生の海岸にある碑に対する案内がわかりにくいのが残念でした。私などは知っているとこですが、他所から来た人にはわかりにくそうです。いろいろとまとまらない事を並べました。ごめんなさい。どうぞ、足が全快し活躍できることを楽しみにしています。お大事に。

かしこ

篠崎伸子

齊藤 功 先生

このお手紙を拝読した直後、先生が目の前にいらして話をされている気がした。直接お話がしたくなり、電話

をかけた。最も話題となったのは外来語の氾濫とも言わべき現象である。コンピュータ社会ゆえの現象かも知れないが、テレビのニュースでアナウンサーが頻繁に使っている。聞き慣れないカタカナ言葉がたくさん出てきて辟易していると言うのが、九十歳の先生と七十歳の教え子の共通の感想となった。「美しい日本語を話せる人がいなくなってしまう」。お互いの胸に秘めた結論である。

そんなことを以前から思っていた私は、先年求めてあった平凡社「中国古典文学大系」の『金瓶梅』をこの三月中旬から読み始めていた。中国明代の男女の愛欲の長編小説である。小野忍、千田九一お二人の七五調の名訳を気に入ってこの長編に挑んだ。かつて高校生の頃、中西三郎先生の古典の授業を気に入って長編小説『水滸伝』に挑み挫折をした経験が頭をよぎったが、訳の面白さがそれを打ち消した。小説中の漢詩や成語の日本語訳の音調がすばらしく、声を出して読みたくなる。こうである。

男は片手に呉鉤とり 戦の庭に出るならい

鉄の心がなにゆえに くじけてだめになるのやら

ごらんよ項羽と劉邦は 恐れれば人みな恐れるが

虞姫と戚氏に会ったゆえ あわれ豪傑身は破滅

(第一回)

むかし思えば最初から 結びの神のまぢがいよ、あいつを亭主にもつなんて。自慢するのじゃないけれど、あんなからすが鳳凰の、亭主になってなるものか。

(第一回)

国語を担当された篠崎先生に是非ともご紹介したく、訳文中の語句に意味を付け加えた。生徒が宿題を提出する気分での複写を届けた。そのお返事が手紙の文中の『金瓶梅』以下の文言である。

先生と九十九里町の三文学碑、夢二の「宵待草詩碑」、光太郎の「智恵子抄詩碑」、蘆花の「小説新春碑」や藤原行成筆など平安朝のかなについての文学・書文化談義が楽しい。

中学校一年生の時にお世話になった先生にこうして再び教えを受ける幸運に恵まれている。恩師からの手紙を楽しみにしている老人である。恩師とは何と有りがたいことか。

(令和五年七月七日)



## 時の流れとともに

市原市(元富口) 村上 久江

若い夫婦の庭師であった。三十代前半のさあー、これから生涯を掛けて自分の選んだ仕事を完成させていこう、という気構えが感じられた。表情にはためらないのないう清々しさがあった。もちろん経験を積んだ者の少し疲れたような余裕はない。

松、山桃、椿、山茶花、棕櫚、金木犀、柿、満天星、躑躅、さつきと一軒家の狭いわが家の庭にはめいっばいの樹々が植えられた。そして、形よく整えられた大小の石、灯籠と若い庭師夫婦はてきぱきと仕事を進めた。

庭師の車にはクレーンが搭載されていて、人を雇わず自分達のもてる美意識や感覚で仕事を請け負っていたようである。庭樹の選定は全て庭師にまかせてあったが、そのなかでも松は一番こだわり、見目麗しいものを選んだという。また、なぜか梅は老いた樹であるという。

なぜそんな老いて先のわからないものを選んだのかと、夫もわたしも尋ねることはなかった。何よりも若くててきぱきと仕事を進め、それぞれの樹についての知識をわかっているかぎり話してくれることに満足していた。わたし達もまだ若く、これからいろいろなことを経験して

いく途上にあった。

結婚し二人の子供達も小学生になり、わたし達家族は西千葉の団地から市原の地に越してきた。夫は仕事から解かれる土、日、祝日は庭樹の手入れに余念がなかった。垣根のように植えられた椿、山茶花、ずんずんと天に伸びる棕櫚、縦横に嵩を増していく庭樹のそれぞれ、それらの剪定や消毒に追われた。

柿は毎年溢れるほどの甘い実を実らせた。山桃も薄甘い実を実らせた。四季折々の姿を見せてくれる庭樹とともに、わたし達家族四人の仕合せの日々は続いた。

夫は庭樹を生涯の友として生きたような人でもあった。ローンを組み家を建てお金のないながらも、庭造りにはある程度のお金を掛けた。七つ年上の夫の人生設計に、わたしは口を挟まなかった。

四季を通じて樹々を見守り、健やかに成長させていくことはひとつの仕事として成り立つくらい大変で、やり甲斐のあることである。

夫の年々のサイクルは庭樹とともにあった。害虫にでもやられたのか、老いた梅の樹に異変が起きた。夫はそのひと幹を伐りその傷口に、店で求めてきた何がしかを塗り後の手当もしつづけた。松の剪定は枯れた葉を丁寧に取り除き、全体のバランスを考えながら時間を惜しま

ず掛けた。時には手を休め、樹に何か語りかけているようにもあつた。

人は生涯の歩みのなかで偶然のように、ふと出会ったものに惹かれのめり込んでいくことがある。夫の庭樹への愛着もそのようなものであつたらうか。

人生の階段を次へと導いてくれる、掛けがえのない人との偶然の出会い。また好きで長く続けていく趣味のなかにも、自分にとって掛けがえのない何かがあることを知る。ひたむきな歩みでありたい。

足掛け七十七年の生涯を生きて夫は召された。闘病生活十五年、定年近くの六十歳のとき癌が見つかり、癌とともに生きた晩年だった。抗癌剤により痩せ細った身体、それでも気分のない時を見計らって庭樹の剪定をし、消毒をした。平成の最後の年に身罷みまかつた。令和の新時代を生きることは叶わなかった。

市原の地に越してきて、早や四十年近い歳月が流れる。庭樹は強く逞しくわが家の庭に根をおろし、それぞれの四季を繰り返した。夫のように小まめに剪定や消毒の出来ない七十歳を過ぎたわたしは、思いきって庭樹のほつんどを伐ることにした。伐採を生業としている方にお願ひした。

庭樹を伐つてから四年余が過ぎる。椿と金木犀のひこ

ばえが成長し一メートルを越えて伸びているが、それ以上は伸ばさないつもりだ。手の届く範囲で剪定ができるように。

庭樹の陰で花を充分に咲かせることができなかつた躑躅とさつきが、今年は満開に咲いてくれた。球根を埋めた百合とダリアも根付き、昨年、今年と色鮮やかに華やいで咲いてくれた。

自身の手を掛け、芽生えを愉しみとし、蕾をもち開花すれば、その花の美しさ清らかさを朝の目覚めのひとときに、昼に夕にと愛でて心のなかをほんのりと温める。

夫が、己が生涯を掛けて庭樹を愛し慈しんだ庭。わたしは花の咲き溢れるに庭にしたいと思う。時は止めようもなく変化をしつづけ、世界は紛争のただなかにあるが、老いてなお花のように清らかで優しくありたいものだ。

## 外山梅子さん追悼

—— 遙かな歌の旅を終えられて

埴谷 大掛 史子

「文芸さんむ」の前身、旧山武町発行の「すぎの実」時代から四半世紀に亘り、短歌を提稿しつづけてくれた東金市（元山武町矢部住人）の外山梅子さんが、二〇二三年一月二六日九五歳の誕生日に逝去された。山武町短歌会会員として「すぎの実」に毎号提稿され、文化祭では達筆の色紙が華を副えたが、矢部の土地が高速道路建設の対象となり、東金市道庭の代替住宅に転居された。

東金市民となつてから、外山さんの新たな表現の旅は始まる。自宅に近い城西国際大学の一般社会人向けオーブンカレッジの受講生となり、私も誘われて共に受講したが、その講師陣の華やかさ、贅沢さはこの上もなく、ドナルド・キーン氏、篠田正浩監督、詩人吉増剛造氏など超一流の文化人を招いてのカリキュラムによる講座は、講師と聴講生の距離が近く濃かった。

短歌結社「万象」の東金支部で故安藤昭司氏の指導のもと、外山さんの表現力は一段と磨きがかかった。

・杵き日にPXで目の覚めるやうな赤きハイヒール買ひくれし夫

PXというのは、敗戦占領の昭和二〇年から講和が結ばれた同二七年まで、銀座四丁目の和光が米軍の家族向け日用品や装飾品などの販売所となり、日本人も自由に買うことができた、当時最先端の贅沢品購入の門戸が一般庶民にも開かれた、敗戦国女性たちの垂涎すいゑんの店だった。一七歳で終戦を迎えた外山さんの青春は、PXで真紅のハイヒールを買ってくれるというご夫君の愛と感性に育まれ、支えられて、表現者の道を歩みつつ、ご結婚後は一児を育てながら、抜群のセンスと技術でプロ級の洋裁の仕事をごなした。

・墨彩画の群なす菖蒲の図柄のやう「イツセイ」のアンサンブル着心地よし

梅子さんは早い時期に寡婦となられ、東金転居ののちは「万象」に拠る短歌活動、「文芸さんむ」への寄稿、画家や陶芸作家たちとの交流、城西国際大との絆、地元東金市の文化活動と、健康、長寿を武器に人生最晩年を思う存分生き抜き、誰にも世話をかけず、豊かな人生の幕を一人で降ろした。

ご子息も建築設計関係のお仕事、ODAなどで実績を上げ、山武市立なるとうごども園の開設にも尽力された。外山梅子さん、長い間楽しくお付き合いさせていただきありがとうございます。